

巻頭随想

[かんとうずいそう]

代表取締役社長 酒匂明彦



以前の誌巻頭随想で、「日本の情報サービス産業が、本質的な構造変革を成しえないまま、何十年も経ってしまった」と書いた。「この産業の一角を占める当社も、その例外たりえていない」とも。

あれから約4年を経た現在の日本の情報サービス産業と当社グループの現状はどうであろうか。経営環境面を見ると、クラウド活用などITの利用形態は想定したとおり変化してきた。グローバル企業がITベンダーにグローバル対応を求めるのは普通のことになった。ソーシャル技術は急速に浸透した。ビッグデータ活用やIoTが企業のIT投資における主要な関心事になった。そして、戦略的分野へのIT投資が拡大する陰で、従来型のシステム構築・運用に対するコスト削減圧力が続いている。

こうした環境変化に対して、当産業の各社はそれぞれ手を打っている。当社グループについて言えば、医薬品開発支援や企業年金分野など特化領域で先鋭化を進め、クラウド分野では新サービスを立ち上げた。開発プラットフォームとして整備してきたAZAREAを運用も含むサービス提供の基本プラットフォームとして拡充しており、これをベースに知識集約型企業への再スタートを切った。インドIT企業のAccel Fron-

tline Limitedをグループに迎えるなど、グローバル対応力強化は特に注力して取り組んだ。今号では、こうした取組みにかかわる原稿も載せることができた。ぜひ、じっくり読んでいただきたい。

もっとも、これらをもって当社グループが環境変化に十分対応し切れているとは私は思っていない。グローバルのリソースを活用して実績を重ねてゆくのはこれからであるし、新たに主流となってきた技術の事業化は、グループ全体で見てもわずかなものでしかない。今なお従来型のシステム構築・運用が事業の大半を占めているのが実情である。現在は、一時的な特需の発生などもあって日本の情報サービス産業全体が微温的な環境に置かれているが、それに甘んじていては、早晩、緩やかな衰退に向かうことは避けられない。

「CACは、もっと知的で力強く、創造性あふれる存在になりうると私は信じている」とも、前述の巻頭随想には書いた。むしろ、今もそう信じているし、知的で創造性あふれる企業だけが、世界のIT産業の中で輝くことができるのだと思っている。日本の情報サービス産業にも当社グループにも、そうなれるチャンスは大いにある、挑戦する心さえ失わなければ。